



TITLE:

カイケ語の使役構文

AUTHOR(S):

本田, 伊早夫

CITATION:

本田, 伊早夫. カイケ語の使役構文. シナ=チベット系諸言語の文法現象
2: 使役の諸相 2019: 29-44

ISSUE DATE:

2019-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/245164>

RIGHT:

カイケ語の使役構文*

本田 伊早夫

1. 言語の概要

カイケ語はネパール北西部ドルパ郡（カイケ語で *dolpā*; 地図 1 参照）、ティチュロン（カイケ語で *tichyuroṅ*; 地図 2 参照）と呼ばれる地域において話されている言語である。この言語の存在は Snellgrove (1989 [1961]) において文献上初めて報告され、その後、Fürer-Haimendorf (1988 [1975]) や Jest (1975) 等でも言及されているが、言語が話されている地域や、話者の文化・社会等について詳細に報告したのは、実際にティチュロンに 1968 年から 1969 年にかけて約 1 年間滞在し、調査を行ったアメリカの文化人類学者 James Fisher であった。その研究調査の集大成である Fisher (1987 [1975]) では、彼が滞在した、カイケ語地域の中心地であるサハール・タラ（ネパール語で *sahar tāṛā*; カイケ語では *tā:raṅ*; 地図 2 では *tarangpur* と表記されている）の文化・社会について主に記述されている。これに先立ち、ネパールの諸言語の word list が収められた Hale (1973) において、Fisher が収集し記述したカイケ語の word list が発表されている。この word list に掲載されているものはすべて音韻表記ではなく、デヴァナガリ文字によって書かれたものをローマ字転写したものであるが、近年までこの word list がカイケ語の概要を知ることができる唯一の資料であった。その後現在までに、著者自身 (Honda 2008a) に加え、David Watters (Watters 2006) や Ambika Regumi (例えば Regmi 2013) がカイケ語についての調査を行い、論文を発表している¹。

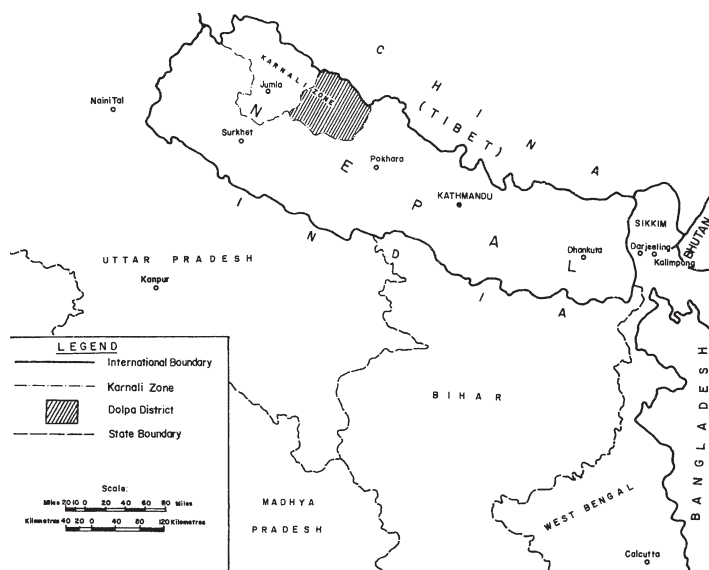
カイケ語は上述の通り、ティチュロンという地域で話されている言語であるが、ティチュロンの中でも 3 つの村、サハール・タラ、タラコット（ネパール語で *tāṛākoṭ*; カイケ語では *coṅ*; 地図 2 では *tarakot* と表記されている）、トゥパ・タラ（ネパール語で *tupa tāṛā*; カイケ語では *tumu*; 地図 2 では *tupa* と表記されている）のみで話されており、ティチュロンの残りの村々ではこの地方のチベット語方言が使われている（著者はこの方言を Tichyurong Tibetan と呼び、現在、その言語調査を実施中である）。カイケ語が使用されている 3 つの村々は endogamous group（同族婚集団）を形成してはおらず、近隣の村々の Tichyurong

* 本稿は 2015 年 1 月 24-25 日京都大学人文科学研究所において開催された第 2 回 TB + 研究会において口頭発表した内容に一部修正を加えたものである。同研究会を主催した池田巧教授、及び同研究会にて貴重なコメントをいただいた各位に感謝申し上げます。また本稿は日本学術振興会科学研究費補助金の支援を受けた研究（平成 21-23 年度、基盤研究 (C) 課題番号 21520463 「タマン諸語とカイケ語の記述、および他のヒマラヤ諸語との言語系統、接触に関する研究」、平成 24-26 年度、基盤研究 (C) 課題番号 24520486 「カイケ語の記述調査、及びチベット語との言語接触を中心とする歴史言語学的研究」）の成果の一部である。ここに記して謝意を表したい。

¹ 著者はこの他、Honda (2004), Honda (2008b), Honda (2008c), Honda (2011), Honda (2013) においてカイケ語に関する研究発表を行っている。

Tibetan を話す人との結婚も稀ではない。特に、サハール・タラに隣接するゴンバ・タラ（ネパール語で *gomba tārā*；カイケ語では *kommā*）との交流はさかんで両村間の婚姻も多く、それ故当然ながらカイケ語話者には Tichyurong Tibetan を理解し話せる人がかなりいるようだ。更に、ネパールにおける他の少数言語民族と同様、ネパールの national language であるネパール語が理解できない、話せないという人は（ほぼ？）皆無であり、特に、カトマンズなどの大きな町に引っ越し生活している人や若年層の間でネパール語の使用が増えている。

著者のインフォーマントからの情報をまとめると、カイケ語の母語話者数はおおよそ 1,000 人ほどではないかと推測される。この点について Regumi (2013: 1) は “According to the CBS report, 2001 the total population of the Kaike is 2000, of which only 39.7% (i.e. 794) of the total population of Kaike speak this language as the mother tongue. However, the National Population and Housing Census, 2011 reports that the total speakers of the Kaike language amounts to only 50.” と述べた上で脚注で “However, in reality, there are at least one thousand speakers of this language (based on the field study done in 2011).” と注釈を加え、著者とほぼ同じ見解を示している²。

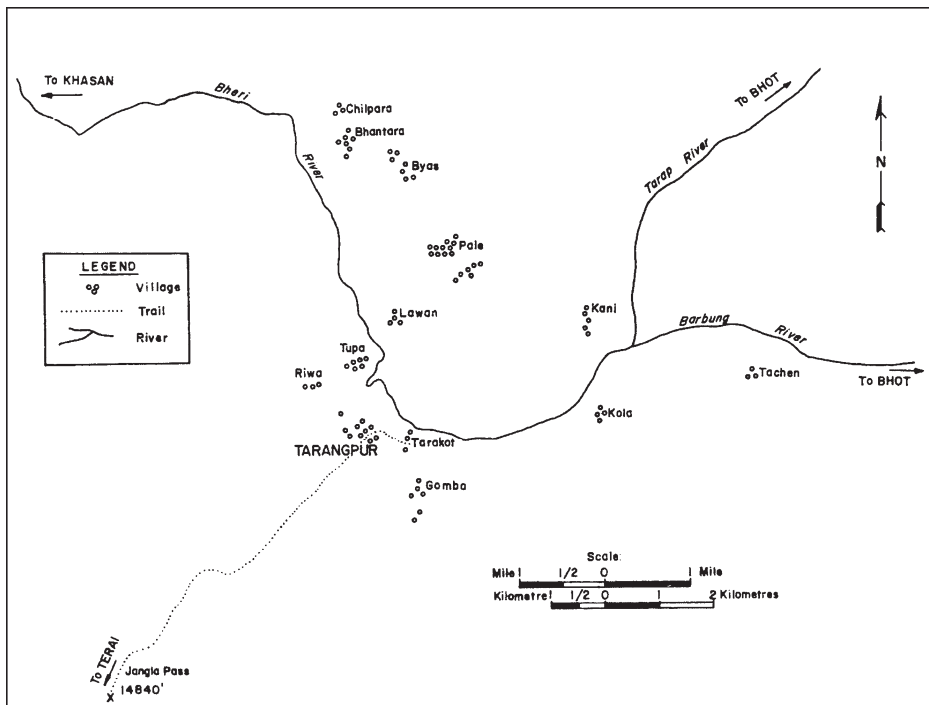


地図1 ドルパ郡 (Fisher 1987 [1975]: 16)

カイケ語はチベット＝ビルマ語派の言語であり、その内、Bodic に属することは間違いのないと思われるが、更に詳細な系統関係は未だ不確定な部分がある。

² Bradley (1997) ではカイケ語の話者数が “about 2,000” と述べられているが、Bradley (1997) の記述は、少なくともカイケ語とタマン語群については、不正確、あるいは誤りが多く、この数字は当てにならない。

現段階での著者の見解は Honda (2008a) で論じた通りであるが、カイケ語と最も近い言語はタマン諸語ではないかと考えている。ただし、カイケ語はタマン語群の言語であるとする Driem (2001: 979) や Watters (2002: 15; 2003: 17) の見解とは異なり、カイケ語は、タマン祖語 (Proto-Tamangic) から派生したと考えられている言語 (つまりタマン諸語) とは同レベルで語れないことは明らかであり、カイケ語とタマン諸語との系統関係はかなり遠いものであると推測している。この点で著者の見解は西 (1991: 92) のそれに最も近いと言えよう。



地図2 ティチュロン (Fisher 1987 [1975]: 21)

2. カイケ語における使役構文³

本稿では、カイケ語において「使役」構文と言えるものの内、動詞 *phān-* を使用した構文を取り上げ、以下論じていくこととする。

動詞 *phān-* は他の動詞に後続し「～を / に～させる」といった使役、あるいは「～

³ カイケ語は tone language であるが、カイケ語の tone system の分析が未だ完了していないこともあり、本論文では tone について記述をしていないことを注記しておく。

に～させてやる、させたままにしておく」といった意味を表す。その際、先行する動詞は動詞語幹に何も付かない形で現れ（つまり *V-ø phān-*）、*tense, aspect* などを表す接辞は *phān-* に付く。*causee* には何も付かないか（*Absolutive* 格；以降 *ABS* と表記する）、*Dative* 接辞が付く（以降 *DAT* と表記する）。*Dative marker* には以下の3つの形態があり、その分布はおおよそ以下の通りとなっている。

Dative marker とその分布

- i 語末が短母音の語に付く場合：語末短母音が長母音となる
- ii 語末が長母音、二重母音、あるいは /m/ 以外の子音の語に付く場合：X-ga
- iii 語末が /m/ の語に付く場合：X-ma（しばしば -ga）

上記の通り、語末が /m/ の語に付く場合、*Dative* 接辞は *-ma* が規範であると思われるが、*-ga* が使われている例も散見される。更に、*-ga* は語末が短母音の語の後でも現れることもあり、上記の分布はかなり緩い規範となっているようである。なお、これらの *Dative* 接辞は *Locative*、*Allative* としても使用されている。

本稿では、カイケ語のこの使役構文において、*causee* に何も付かないか、*DAT* 接辞が付くかという点に注目し、この違いが動詞や文の意味とどう関連しているか、どういった動詞が *ABS*、あるいは *DAT* を選択するのかということについて記述していくこととする。

この分布について結論をまず述べると、I) *causee* に *ABS*（何も付かない形）しか可能でない動詞、II) *ABS* と *DAT*（*DAT* 接辞が付いた形）の両方が可能な動詞、III) *DAT* しか可能でない動詞の3種類の動詞がある。ただし、母語話者が判断に迷うケースもあり、この分類は暫定的なものと言わざるを得ない。

以下、I, II, III の3つのタイプにどんな動詞が該当するか例示する。ここでは動詞を *intransitive* と *transitive* に（更に *monotransitive* と *ditransitive* に）分けているが、それは *causee* に *ABS* を使うか *DAT* を使うかの分布を説明する際、*intransitive-transitive* の区別が有用であると考えられる為である。ただし、以下の2点を注記しておく。

まず第一に、以下ではカイケ語のそれぞれの動詞が表す意味を（雑ではあるが）英語で表記しているが、言うまでもなくその動詞が *intransitive* か *transitive* であるかは、それら英語における文法や意味によるものではなく、あくまでカイケ語動詞のそれによるものであるという点である。例えば、動詞 *khyār-* と *nyin-* はいずれも ‘to fear’ と ‘be afraid’ と訳せるのでそう表記しているが、そもそも英語の ‘to fear’ と ‘be afraid’ では *valency* が異なるし、カイケ語の *khyār-* と *nyin-* の *valency* を示しているわけではない。第二に、動詞の中には *transitive*、*intransitive* の両方で使われるものもあり、そうした動詞の場合、*causee* がどういう形を取るかは、*transitive*、*intransitive* のどちらの機能で使われているかによる。

I causee に ABS しか可能でない動詞の例

intransitive

khaŋ- ‘be/get painful, sick’, *chār-* ‘grow’, *tā-* ‘recover (from sickness)’, *nāt-* ‘be/get injured, sick’, *phum-* ‘be paralyzed’ など

以下は patient にあたる名詞が animate ではなく、必ず inanimate である動詞

barāŋ- ‘be/get full (of stomach)’ (例 (8) を参照), *sāt-* ‘cease (of sb’s sleeping, i.e., sb to wake up)’ (例 (9) を参照), *soe-* ‘come back (of memory), revive’ (例 (10) を参照), *syāŋ-* ‘be/get happy, like’ など

transitive 無し

II causee に ABS と DAT の両方が可能な動詞の例

intransitive

ā- ‘sleep’, *ku-* ‘wait’, *kyāl-* ‘win’, *kyu-* ‘vomit’, *khyār-* ‘fear, be afraid’, *gusyi-* ‘be/get hungry’, *got-* ‘be/get tired’, *cum-* ‘close eyes’, *cyāŋ-* ‘stand’, *syē:tāŋ/thā:luŋ* *cyāŋ-* ‘be/get angry’ (*cyāŋ-* ‘stand’), *char-* ‘feel lazy’, *chal-* ‘sneeze’, *chyām-* ‘dance’, *chyuŋ-* ‘stay, sit’, *tir-* ‘get together’, *sam tu-* ‘feel sad’ (*sam* ‘mind’), *dā-* ‘cry’, *dāl-* ‘run’, *nyin-* ‘fear, be afraid’, *piŋ-* ‘sink’, *bor-* ‘jump’, *yurŋ-* ‘be/get insane’, *yot-* ‘be/get drunk’, *rai-* ‘laugh’, *let-* ‘climb’, *len-* ‘walk’, *wai-* ‘go’, *soə-* ‘come’, *syi-* ‘die’ など

transitive 無し

III causee に DAT しか可能でない動詞の例

intransitive 無し

transitive

monotransitive

hā ko- ‘understand’, *khye-* ‘do’, *gāl-* ‘swallow’, *cyin-* ‘remember’, *tā-* ‘hear’, *thu-* ‘wash’, *de-* ‘sing, play’, *doŋ-* ‘make’, *nor-* ‘err’, *nyān-* ‘listen, obey’, *tyu bul-* ‘be/get thirsty’ (*tyu* ‘water’), *let-* ‘forget’, *sat-* ‘kill’, *sān-* ‘bear, endure’, *syo-* ‘know’ など

ditransitive

roə- ‘say, talk’, *lan-* ‘teach, learn’, *sar-* ‘write’, *syāt-* ‘speak’ など

上記の分類を見てまず言えることは、transitive verb には ABS は使われないということである。つまり transitive verb に関しては、その動詞が表す事象・出来事に対する causer, causee の volitionality, あるいは control の度合いに関係なく、causee は常に DAT となる。カイク語の場合、この volitionality, control という概念は、conjunct/disjunct という名前で良く知られている区別を説明するのに有用である⁴。カイク語の conjunct/disjunct は Kathmandu Newar のそれと大変良く似てお

⁴ カイク語の conjunct/disjunct については Watters (2006) を参照のこと。ただし、いくつかの点で著者自身の分析と異なるため、それらを含め、Honda (2008c) で報告、論じた。Conjunct/disjunct という用語は Tournadre (2008)

り, David Hargreaves が Kathmandu Newar の conjunct/disjunct を記述している Hargreaves (2005) で使用している, control verbs と noncontrol verb の区別が記述に大変有効である。

control verbs: “those that describe prototypical self-initiated behaviors”

noncontrol verbs: “those that describe events incompatible with self-initiated behavior”

カイケ語の conjunct/disjunct は以下の例では動詞接辞 *-pā* (perfective/conjunct) と *-bo* (perfective/disjunct) によって示されているが, control verb の *sat-* ‘to kill’ の場合も noncontrol verb の *tā-* ‘to hear’ の場合もどちらも *phān-* による使役文で causee は DAT のみが可能であり, ABS は容認不可である (1c, 2c)。このように, transitive verb を含む使役文で causee が ABS を取るか DAT を取るかという点に関しては causee の volitionality, control の度合いは無関係である。

(1) *sat-* ‘to kill’ 「殺す」

- a. *ŋa-i rām sat-pā*
1sg-ERG Rām kill-PF.CJ

私は・が Rām を殺した。

- b. *hari-i rām sat-bo*
Hari-ERG Rām kill-PF.DJ

Hari は・が Rām を殺した。

- c. *ŋa-i hari:/*hari rām sat phān-pā*
1sg-ERG Hari.DAT Rām kill CAUS-PF.CJ

私は・が Hari に Rām を殺させた。

(2) *tā-* ‘to hear, sound’ 「聞こえる」

- a. *ŋa-i ke: tā-bo*
1sg-ERG sound hear-PF.DJ

私(に)は(何か)音が聞こえ(るようになっ)た。

などでの批判を受け, 近年ではその代わりに “egophoricity” という用語が用いられることが多くなってきており (Widmmer 2017: 295–297), 著者もこれに全面的に同意するものであるが, 本稿では引き続き conjunct/disjunct という用語を, Hale (1980) で使用されているような概念としてではなく, “volitionality”, “locus of knowledge” によって “motivated” (Watters 2008: 300) された, “particular evidential pattern” (DeLancey 2003: 278), あるいは “a set of oppositions that index intentionality/evidential contrasts” (Hargreaves 2003: 376) として使用していることを付記しておく。

- b. *nu-i ke: tã-bo*

3sg-ERG sound hear-PF.DJ

彼・彼女（に）は（何か）音が聞こえ（るようになった）た。

- c. *ŋa-i nu:/*nu an-na den tã phān-pā*

1sg-ERG 3sg.DAT this-GEN song hear CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女にこの歌を聞かせた。

Causee に DAT しか可能でない動詞はすべて transitive verb であり, intransitive verb は一つも含まれていない。この分類において動詞 *bul-* ‘to be/get thirsty’ を transitive verb に分類していることについて疑義を持たれるかも知れないが, 実はこの動詞は常に名詞 *tyu* ‘water’ と共に使われる動詞であり, 名詞 *tyu* を目的語に取る他動詞として分析すべきものである。よって *tyu bul-* は文字通りには ‘to want water’ と訳すのがより適当である。

(3) *tyu bul-* ‘to be/get thirsty’ 「喉が渴く, 水を欲する」

- a. *ŋā tyu bul-bo*

1sg water thirsty-PF.DJ

私は喉が渴いた（水を欲するようになった）。

- b. *nu tyu bul-bo*

1sg water thirsty-PF.DJ

彼・彼女は喉が渴いた（水を欲するようになった）。

- c. *ŋa-i nu:/*nu tyu bul phān-pā*

1sg-ERG 3sg.DAT water thirsty CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女に（彼・彼女の）喉を渴かせた（水を欲するようにさせた）。

Transitive verb に *phān-* を付けて使役文にした場合, causee が ABS になることがない理由であるが, causee が ABS であると, ABS 名詞が文に二つ存在してしまうことに関連していると考えられる。この点でカイク語は, 「を」がついた名詞が複数存在する文の受容不能な日本語と同様である。一方, 文中に二つ DAT 名詞が共起することは問題ない。それ故, ditransitive verb (例 (4)) や, DAT 名詞を項に取る intransitive verb を使役文にした場合, DAT 名詞の格はそのままであり, 二つの DAT 名詞が文中に共起することになる。

(4) roə- ‘to say, talk’ 「話す」

- a. *ŋa-i an-na ruŋ hari: roə-pā*
 1sg-ERG this-GEN story Hari.DAT say-PF.CJ

私は・がこの話を Hari に話した。

- b. *ŋa-i nu/*nu nu-na ruŋ hari: roə phān-pā*
 1sg-ERG 3sg.DAT 3sg-GEN story Hari.DAT say CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女にこの話を Hari に話させた。

さて intransitive verb の方とは言うところ、その大多数は causee に ABS と DAT の両方が可能であるが、一部の intransitive verb は ABS のみ可能である。後者の部類に入る動詞は *khaŋ-* ‘be/get painful, sick’, *chār-* ‘grow’, *tā-* ‘recover (from sickness)’, *nāt-* ‘be/get injured, sick’, *phum-* ‘be paralyzed’ など、すべて noncontrol verb である。

(5) *khaŋ-* ‘to be/get painful, sick’ 「痛い・痛くなる、病気だ・病気になる」

- a. *ŋa khaŋ-bo*
 1sg painful-PF.DJ

私は痛くなった・病気になった。

- b. *ŋa-i nu/*nu: khaŋ phān-pā*
 1sg-ERG 3sg painful CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女を痛くさせた・病気にした。

これら ABS しか取れない動詞の多くは patient 項として inanimate noun (phrase) (例えば以下の例文 (6) の *ŋa-na phau* ‘my belly’) を取ることができ、またその内のいくつかは inanimate noun (phrase) しか取ることができない。Patient 項が inanimate 名詞である文に *phān-* を加えた文を使役文と呼べるかは疑問だが、いずれにせよ、*phān-* は intransitive 文を transitive 文とし、命令文とする際広く使用されることを記しておく。

(6) *khaŋ-* ‘to be/get painful, sick’ 「痛い・痛くなる、病気だ・病気になる」

- ŋa-na phau khaŋ-bo*
 1sg-GEN belly painful-PF.DJ

私の腹が痛くなった。

(7) tā:- ‘to recover (from sickness)’ 「(病氣・怪我が) 治る」

a. *nu tā:-bo*

3sg recover-PF.DJ

彼・彼女は・が(病氣・怪我から)治った。

b. *ŋa-i nu/*nu: tā: phān-pā*

1sg-ERG 3sg recover CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女(の病氣・怪我)を治した。

c. *khaŋ-nān tā:-bo*

painful-NM recover-PF.DJ

病氣が治った。

d. *ŋa-i nu-na khaŋ-nān tā: phān-pā*

1sg-ERG 3sg-GEN painful-NM recover CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女の病氣・怪我を治した。

(8) barāŋ- ‘to be/get full (of stomach)’ 「(腹が) いっぱいだ・いっぱいになる」

a. *ŋa-na phau barāŋ-bo*

1sg-GEN belly full-PF.DJ

私の腹は・がいっぱいになった。

b. *ŋa-i nu-na phau barāŋ phān-pā*

1sg-ERG 3sg-GEN belly full CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女の腹をいっぱいにした。

c. *nu-na phau barāŋ phān-ā*

3sg-GEN belly full CAUS-IMP

彼・彼女の腹をいっぱいにしな。

以下の例では、動詞 *sāt-*, *soe-* はそれぞれ「眠りから覚める」, 「(記憶などを) 取り戻す」という意味を表すが, いずれも必ず *miwa* ‘sleeping’ や *yākā* ‘memory’ (あるいは *tāmmā* ‘consciousness, memory’) といった inanimate noun (phrase) を項にとり, *phān-* によって transitive 文となった場合, causee として animate noun (phrase) が現れることもない。

(9) sāt- ‘to cease (of sb’s sleeping, i.e., to wake up)’ 「眠りが終わる」a. *ŋa-na miwa sāt-bo*

1sg-GEN sleeping cease-PF.DJ

私の眠りが終わった（私は眠りから覚めた）。

b. *ŋa-i nu-na miwa sāt phān-pā*

1sg-ERG 3sg-GEN sleeping cease CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女の眠りを覚ました（私は・が彼・彼女を起こした）。

(10) soe- ‘to come back (of memory; i.e., to recall sth), to revive (of flowers, etc.)’

「(記憶などが) 戻る」

a. *ŋa-na yākā soe-bo*

1sg-GEN memory come.back-PF.DJ

私の記憶が戻った（思い出した）。

b. *ŋa-i nu-na yākā soe phān-pā*

1sg-ERG 3sg-GEN memory come.back CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女の記憶を戻した（思い出させた）。

ちなみに、形容詞を含んだ文を他動詞文とする手段の一つとしても *phān-* が使われるが、その際動詞 *ra-* ‘to become, happen’ か *khye-* ‘to do’ を必要とする（動詞 *doŋ-* ‘to make’ を使うこともできる形容詞もある）。

(11) ADJ-*ma rā/khye phān-**ŋa-i ŋa-na yim kyī-ma ra/khye phān-pā*

1sg-ERG 1sg-GEN house big-NM become/do CAUS-PF.CJ

私は・が私の家を大きくした。

一方, causee に ABS と DAT の両方が可能である動詞 (Type II) の方であるが, この部類には noncontrol verb も control verb も含まれている。Control verb である intransitive verb はすべてこの部類であり, noncontrol verb の方は Type I と Type II に分かれている。Type I である noncontrol verb と Type II である noncontrol verb の違いは何かという点であるが, 一言えそうであることは, 前者が身体的な変化, 病気, 怪我などを表す動詞であるのに対して, 後者の多くが精神的な状況, 感情などを表す動詞であるということである。例えば *khyār-* ‘fear, be afraid’, *gusyi-* ‘be/get hungry’, *got-* ‘be/get tired’, *syē:tāŋ/thā:luŋ cyāŋ-* ‘be/get angry’ (*cyāŋ-* は 動詞 ‘stand’), *char-* ‘feel lazy’, *sam tu:-* ‘feel sad’, *nyin-* ‘fear, be afraid’, *yuŋ-* ‘be/get insane’,

yot- ‘be/get drunk’ などである。こうした後者の動詞の場合、その動詞が表す状況や状況の変化に対する自身の volitionality, control 度合いはそう高くはないものの、Type I の動詞の場合よりは高いと考えられる。動詞 *phān-* による使役文で考えると、causee の control, 関与度合いが比較的高いということになる。

さて、causee に ABS と DAT の両方が可能である動詞において、ABS の場合と DAT の場合でどのような意味の違いがあるかについては、母語話者である私のインフォーマントも判断に迷ったり混乱している部分も多く、確定的なことは言えないが、概して ABS を使った場合の方が causee の行為に対する causer の関与が強く、それに比例して causee の関与, control 度合いが低い意味となるようだ。英語に訳すと、ABS を使った場合 ‘force, make, get’ といった使役の意味が強く、DAT の場合 ‘let, allow’ といった「(自然に) そういう状況になる、(そういう状況になるのを) 許可する」といったニュアンスが強くなる。この点においてカイケ語のこの構文は日本語の「させる」を使った使役構文と似ていると言えよう。これまで日本語のこの使役構文において causee に「に」(DAT) を使う場合と「を」(ABS) を使う場合の意味の違いについては様々な用語で説明されてきた。例えば、Comrie (1985: 334) は *coercion* という語を使い、以下のように説明しているが、カイケ語の使役文についてもこういった説明が当てはまるであろう。

‘Sentence (139) [i.e., (12a)], with the direct object proposition *o*, implies greater coercion (e.g., Taroo forced Ziroom to go); (140) [i.e., (12b)], with the indirect object proposition *ni*, implies less coercion (e.g., Taroo persuaded Ziroom to go, got Ziroom to go by asking him nicely).’

(12) Japanese

- a. *Taroo ga Ziroom o ik-ase-ta*
Taroo SUBJ Ziroom DO go-CAUS-PAST

‘Taroo made Ziroom go.’

- b. *Taroo ga Ziroom ni ik-ase-ta*
Taroo SUBJ Ziroom IO go-CAUS-PAST

‘Taroo made Ziroom go.’

(Comrie 1985: 334)

Causee に ABS を使った場合と DAT を使った場合の意味の違いが比較的明らかであると著者のインフォーマントが判断した動詞はそう多くはない。動詞 *syi-* ‘to die’ はそのうちの一つである。

(13) *syi*- ‘to die’ 「死ぬ」a. *nu syi-bo*

3sg die-PF.DJ

彼・彼女は・が死んだ。

b. *ŋa-i nu syi phān-pā*

1sg-ERG 3sg die CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女を死なせた。

c. *ŋa-i nu: syi phān-pā*

1sg-ERG 3sg.DAT die CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女を死なせた。

Causee が ABS である文 (13b) の場合は、causee を死に至らしめた原因に causer が少なからず関与しているケースと理解できる。Causee を何らかの手段で causer が意図的に殺害したケースはもちろん、死にたがっている患者を医者が自殺幫助したケースにも ABS の使用が適当である。更に、殺害の意図はなかったが死に至らしめた原因が causer にあるケースでも ABS が使われる。例えば、川で溺れている causee を助ける手段はあったのに、積極的にそれを講じなかったケースや、causee を死に至らしめようという意図など毛頭なかったが、causer が救急車を呼ぶのが遅かったことで causee が死んでしまう結果となったケース、あるいは、causee が心臓に病気を抱えているということを知らずに causer が彼（女）にとっても悲しくショッキングなニュースを伝えた結果、心臓発作を起こし死に至ったケースなどがこれに該当する。Causee サイドから言えば、causee が自らの死という結果を避けることが（ほとんど）不可能だったようなケース、つまり「死ぬ」行為が自発的なものでは全く無く、「死ぬ」という状況の変化に対する causee の volitionality, control 度合いが極めて低いケースで ABS が使われると言える。最もわかりやすい例をあげれば、causee を死に至らしめた原因が人ではなく、モノやコト、例えば極度の寒さや悪い食べ物を食べた事実、である場合、「寒さ」や「悪い食べ物」といった inanimate noun (phrase) が ERG を、causee は ABS をとる。

一方、DAT を使用するケースとしては、屋上から飛び降りて自殺しようとしている人に対して、特にそれを止める積極的手段を講じず、彼（女）の意のままに自殺させた（causer が causee を死に至らしめた訳ではなく、その死の原因に関与したとは言えない）ケースなどがあげられる。

Causee に ABS を使った場合と DAT を使った場合の意味の違いが比較的明らかである動詞としてはその他に以下のものがあげられる。

(14) yot- ‘to get drunk’ 「酔っぱらう」

- a. *ŋa yot-bo*
 1sg drunk-PF.DJ
 私は酔っぱらった。
- b. *ŋa-i nu yot phān-pā*
 1sg-ERG 3sg drunk CAUS-PF.CJ
 私は・が彼・彼女を酔わせた。
- c. *ŋa-i nu: yot phān-pā*
 1sg-ERG 3sg.DAT drunk CAUS-PF.CJ
 私は・が彼・彼女を酔わせた。

(15) ā:- ‘to sleep’ 「寝る」

- a. *nu ā:-bo*
 3sg sleep-PF.DJ
 彼・彼女は・が寝た。
- b. *ŋa-i nu ā: phān-pā*
 1sg-ERG 3sg sleep CAUS-PF.CJ
 私は・が彼・彼女を寝させた。
- c. *ŋa-i nu: ā: phān-pā*
 1sg-ERG 3sg.DAT sleep CAUS-PF.CJ
 私は・が彼・彼女を寝させた。

(16) kyu:- ‘to vomit’ 「吐く」

- a. *nu kyu:-bo*
 3sg vomit-PF.DJ
 彼・彼女は・が吐いた。
- b. *ŋa-i nu kyu: phān-pā*
 1sg-ERG 3sg vomit CAUS-PF.CJ
 私は・が彼・彼女を吐かせた。
- c. *ŋa-i nu: kyu: phān-pā*
 1sg-ERG 3sg.DAT vomit CAUS-PF.CJ
 私は・が彼・彼女を吐かせた。

他にも, *dā-* ‘to cry’ や *do-* ‘to meet’ などの動詞は違いが比較的明らかな例である。また, 形容詞を含んだ文を他動詞文とする際に *phān-* が使われることについては上述した通りだが (例 (11)), その際 ABS と DAT の違いは causee が animate の場合によりはっきり現れる。例えば, 以下の例 (17) では, ABS を使った場合 (17a), causee である「彼 (女) が偉大な人物になった」原因に causer が積極的に関わった (例えば, 彼 (女) を積極的に援助したり, そうなれる環境, 機会を積極的に作ってあげたりした) というニュアンスが強く, 一方 DAT を使った場合 (17b) は, 特にそうした援助や支援をしていないというニュアンスが強いようだ。

(17) *ADJ-ma rā/khye phān-*

- a. *ŋa-i nu kyi-ma rā/khye phān-pā*
 1sg-ERG 3sg big-NM become/do CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女を大きな・偉大な人物にした。

- b. *ŋa-i nu: kyi-ma rā/khye phān-pā*
 1sg-ERG 3sg.DAT big-NM become/do CAUS-PF.CJ

私は・が彼・彼女を大きな・偉大な人物にした。

結論として, causee が ABS を取るか DAT を取るかという点に関しては, 動詞が intransitive か transitive かということが最も大きな要因と言えようが, それと同時に, 何故 intransitive verb が Type I, Type II に分かれるのか, また, Type II で causee が ABS を取る場合と DAT を取る場合とでどのような意味上の違いがあるのか, という点を説明するのに, 動詞が表す状況や状況の変化に対する causer, causee の関与の度合い, volitionality, control 度合いという概念が有効である。ただし留意すべきは, 動詞接辞 *-pā* と *-bo* 等によって示される区別 (conjunct/disjunct) を説明する際用いる control verb, noncontrol verb という区別の境界と, causee が ABS を取るか DAT を取るかという境界とは一致していないという点である。

略号

1	1st person	DAT	dative	IO	indirect object
3	3rd person	DJ	disjunct	NM	nominalizer
ABS	absolutive	DO	direct object	PAST	past
ADJ	adjective	ERG	ergative	PF	perfective
CAUS	causative	GEN	genitive	sg	singular (used for pronouns)
CJ	conjunct	IMP	imperative	SUBJ	subject

参考文献

- Bradley, David. 1997. "Tibeto-Burman languages and classification." In: David Bradley (ed.), *Papers in Southeast Asian Linguistics No.14: Tibeto-Burman Languages of the Himalayas [Pacific Linguistics A-86]*, 1–72. Canberra: The Australian National University.
- Comrie, Bernard. 1985. "Causative verb formation and other verb-deriving morphology." In: Timothy Shopen (ed.), *Language Typology and Syntactic Description, volume III, Grammatical Categories and the Lexicon*, 309–348. Cambridge: Cambridge University Press.
- DeLancey, Scott. 2003. "Lhasa Tibetan." In: Graham Thurgood & Randy J. LaPolla (eds.), *The Sino-Tibetan Languages*, 270–288. London/New York: Routledge.
- Driem, George van. 2001. *Languages of the Himalayas: An Ethnolinguistic Handbook of the Greater Himalayan Region, vol. 2*. Leiden/Boston/Köln: Brill.
- Fisher, James F. 1987 [1975]. *Trans-Himalayan Traders, Economy, Society, and Culture in Northwest Nepal*. Delhi/Varanasi/Patna/Madras: Motilal Banarsidass.
- Fürer-Haimendorf, Christoph von. 1988 [1975]. *Himalayan Traders: Life in Highland Nepal*. New Delhi: Time Book International.
- Hale, Austin (ed.). 1973. *Clause, Sentence, and Discourse Patterns in Selected Languages of Nepal, part IV: Word Lists*. Norman, Oklahoma: Summer Institute of Linguistics.
- Hale, Austin. 1980. "Person markers: Finite egophoric and allophoric verb forms in Newari." In: Stephen A. Wurm (ed.), *Papers in South East Asian Linguistics 7 [Pacific Linguistics A-53]*, 95–106. Canberra: Australian National University.
- Hargreaves, David. 2003. "Kathmandu Newar (Nepāl Bhāṣā)." In: Graham Thurgood & Randy J. LaPolla (eds.), *The Sino-Tibetan Languages*, 371–384. London/New York: Routledge.
- Hargreaves, David. 2005. "Agency and intentional action in Kathmandu Newar." *Himalayan Linguistics* 5: 1–48.
- Honda, Isao. 2004. "A preliminary report on Kaike (Dolpa, Nepal)." Paper presented at the 10th Himalayan Languages Symposium, Thimphu, Bhutan. December 1, 2004.
- Honda, Isao. 2008a. "Some observations on the relationship between Tamangic and Kaike." *Nepalese Linguistics* 23: 83–115.
- Honda, Isao. 2008b. "Clause chaining with a reduplicated verb in Kaike." Paper presented at the 14th Himalayan Languages Symposium, University of Gothenburg, Gothenburg, Sweden. August 22, 2008.
- Honda, Isao. 2008c. "The Kaike conjunct/disjunct revisited." Paper presented at the 41th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, University of London, London, U.K. September 19, 2008.
- Honda, Isao. 2011. "A preliminary investigation into Kaike tones and a lexical comparison between Kaike, Tamangic, and Tibetan." Paper presented at the 17th Himalayan Languages Symposium, 神戸市外国語大学, 神戸. September 6, 2011.
- Honda, Isao. 2013. "Preliminary notes on the language of Kaike and its relation to other Himalayan languages." Paper presented at the 19th Himalayan Languages Symposium, Australian National University, Canberra, AUS. September 6, 2013.
- Jest, Corneille. 1975. *Dolpo. Communautés de Langue Tibétaine du Népal*. Paris: Éditions du Centre National de la Recherche Scientifique.
- 西義郎 1991. 「ヒマラヤ諸語の分布と分類 (中) "The distribution and classification of Himalayan languages" (Part II)」『国立民族学博物館研究報告』 *Bulletin of the National Museum of Ethnology* 16/1: 31–158.
- Regmi, Ambika. 2013. *A Grammar of Magar Kaike*. München: Lincom Europa.
- Snellgrove, David L. 1989 [1961]. *Himalayan Pilgrimage: A Study of Tibetan Religion by a Traveller through Western Nepal*. Boston: Shambhala.
- Tournadre, Nicolas. 2008. "Arguments against the concept of 'conjunct' / 'disjunct' in Tibetan." In: Brigitte Huber, Marianne Volkart & Paul Widmer (eds.), *Chomolongma, Demawend und Kasbek: Festschrift für Roland Bielmeier zu seinem 65. Geburtstag*, 281–308. Halle: International Institute for Tibetan and Buddhist Studies.
- Watters, David. 2002. *A Grammar of Kham*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Watters, David. 2003. "Some preliminary observations on the relationship between Kham, Magar, (and

- Chebang).” Paper presented at the 36th International Conferences on Sino-Tibetan Languages and Linguistics held in La Trobe University, Melbourne, Australia.
- Watters, David. 2006. “The conjunct-disjunct distinction in Kaike.” *Nepalese Linguistics* 22: 300–319.
- Widmer, Manuel. 2017. “Review of *Evidential Systems of Tibetan Languages*, by Lauren Gawne & Nathan W. Hill (eds.)”, *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 40(2): 285–303.